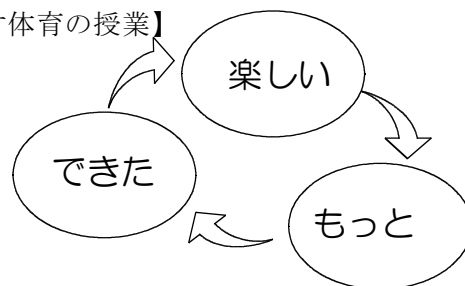


# 体育専科教員活用事業実践の概要

帯広市立若葉小学校 児童数 478名  
(男子 242名 女子 236名)  
教職員数 28名  
体育専科教員 飯島恵美子

【目指す体育の授業】



## ～多様な運動 多様な経験 五感と心に響く体育授業をめざして～

小学校6年間は『ゴールデンエイジ期』ともよばれ、短期間で様々な運動ができるようになる期間（運動神経・神経回路の発達）であることを常に意識し、授業マネジメントを行うとともに、学校全体で「いつでも どこでも だれとでも」を共有する等、体育授業の質の向上を図った。

### 1 授業の工夫・改善

- (1) 年間指導計画より発達段階に応じた指導内容の明確化・体系化を図る
  - ・年度当初に計画案，体育専科の役割などを職員全体で確認（指導の在り方を工夫・改善を図る）
- (2) 成果が「見える」体育授業の指導方法の改善・工夫を図る
  - ・「見通し」をもたせ、「振り返る」ことでお互いを評価できる授業
  - ・スモールステップで達成感を持たせて意欲の喚起を行い，子どもの「動き」「やる気」を向上
  - ・組み合わせ授業により体育の力（運動感覚、運動技術など）の確実な定着
    - \*すべての運動領域で適切な運動の経験を通して，一層の体力向上を図ることができる
  - ・準備運動を基礎感覚づくりの運動としてとらえ，自分の体を思い通りに動かす力の向上
  - ・グループや個人の課題に合った，児童が選択できる授業づくりの工夫
  - ・できた喜びを分かち合える肯定的な雰囲気授業づくり
  - ・学級担任との分担による指導の充実と運動量の確保
- (3) 教師の指導力向上に向けた取組の充実を図る
  - ・道具の工夫による系統的に取り組む活動
  - ・発達段階に合った，多様な運動への段階的な取組
  - ・授業マネジメントの上達による授業力向上
  - ・外部講師の招聘（ダブルダッチ タグラグビー スケート等）
  - ・授業に生かせるワークショップや研修の計画・実施



### 2 学校全体の体力向上に向けた取り組みの充実

～子ども達が動きたくなる環境・場づくり・家庭との連携～

- (1) 「遊びたい」「動きたい」と思える環境・場・動線づくり

- ・グラウンドの整備
- ・遊具の充実
- ・児童会主催の体力アップムーブメント
- ・異学年合同ゲーム大会（ドッジボール 鬼ごっこ 雑巾がけリレー大会 等）
- ・体力アップ週間（学級で取り組む運動を計画的に実施）
- ・環境整備（ケンパステップを描く スケートリンク整備への取組 等）

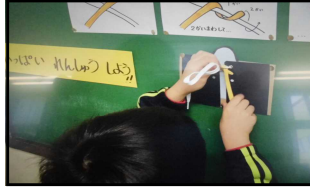


## (2) 器具庫の整備

- ・道具の準備が行われやすいよう（見やすい 出しやすい しまいやすい 等）授業の始まりから終わりまでの動線の計画
- ・担任の仕事量の負担の軽減のため、授業内容の充実

## (3) 冬期間の運動量確保

- ・スケート授業の充実①（氷に上がる前の指導，しぼり方の指導，道具の準備，リンク整備 等）
- ・スケート授業の充実②（タイムチャレンジ，パシュート，ペア滑走 等 意欲を喚起させる指導）



- ・冬場でも「いっぱい走る環境づくり」
- ・雪中でも児童が安全に遊べる場の確保（グラウンドの使い方 除雪方法の工夫 等）
- ・支援学級での，歩くスキーへの取組

## (4) 体力向上に向けた家庭への周知・情報等

体育専科通信，リーフレット，参観日などで体育の取組や体力向上への意欲喚起を行うとともに，ホームページやブログで活動の様子を発信した。



## (5) 掲示物の工夫

運動に対する意欲向上の動機付けになる内容の工夫を行った。  
（体育館入り口、学級前廊下 等）



## 3 体力向上への取り組み ～児童の体力等の現状や課題 新体力テストの結果～

### (1) 平成30年度全国体力・運動能力，運動習慣等調査より

- ・総合評価より \* (A + B) - (D + C) 率

男子 26.9 全国 ( 9.6 )

女子 48.3 全国 ( 21.9 )

上記の結果から，若葉小の5年生は，全国に比べ，運動能力が高い。

男子 △筋力，敏捷性，柔軟性が高い。

▼ソフトボール投げは，全国平均より低い。

女子 △瞬発力，敏捷性，筋持久力，全身持久力が高い。

▼握力は，全国平均より低い。

### (3) 体力テスト結果より（本校の傾向と課題）

- ・中高学年では，ほとんどの種目で全国平均を上回った。
- ・低学年では，ほぼ全国平均であった。
- ・全学年では，ソフトボール投げの値が低かった。

体育のボールを使う運動領域が体力テストを行う1学期ではなく，2・3学期に集中している。今後は，1学期に「体づくり運動」などの領域を計画的に入れたり，児童が自主的にボールを使って遊びや運動に取り組める場を設定するなどし，環境を整え「投げる」動作など，ボール運動全般の向上につなげる必要がある。

